



若者

米 国 学 生 見 聞

唯 木 次 男*

私が1978年の秋から約2年間の出張の機会を得たイリノイ大学はシャンペン—アバナというシカゴから約200 km 南下したところの町にある。人口が約10万、そのうちの3分の1程が学生という田舎町である。周囲には見渡す限り黒褐色をした肥沃な畑地が続く。とうもろこし畑が主だそうである。空から見れば、町はさしずめとうもろこし畑の中にぽつんと浮ぶ陸地の孤島といったところであろう。私が客員研究員として籍を置いたのは日本で言えば金属工学科に当たるところであった。同学科の研究陣、研究設備および研究環境等については、既に筑波大学教授の大塚先生等によって他の雑誌でも紹介されている**ので特に付言することはない。ただ、教授陣の顔ぶれが大塚先生が居られた頃(1974—1976)とは少し変わっている。しかし、学科の研究活動等の紹介については私の意図するところではないので省かせて頂き、ここでは主に米国における学生について滞在中に見聞きしたことを、日本の学生と対比させつつ、肩のこらないお話として述べてみたい。話に入る前に、私は学生として滞在したのではないので、内容は詳細を欠いたものになることをあらかじめお断りしておく。

周知のように、米国では毎年9月頃に新学期が始まる。しかし、新学期に先立ち日本のようにその年の入学試験合格者がどこかに掲示されるというわけではない。その時期の大学発行の新聞には今学期は何名が“登録”を済ませ、昨年の同学期より何名登録者が多いとか少ないとかの記事が載る程度である。高校在学中の成績で入学資格の有無が決定されていると聞く。

“目出たく”登録を済ませた新生は大抵学寮に入る。全部ではない。ただし、一度は学寮で生活しなければならないそうである。個人主義が発達した、あるいはまた独立精神が旺盛と言われるお国柄で育った若者でも、入寮時ともなると寮の周辺では親と手を取り合ったり抱き合ったりして泣く光景が決まって見られるというから奇異に思う。一旦入学するや、成績が所定の域に達しない科目が幾つか出たりすると、他の大学への転校を余儀なくされるとあって学生達は必死に勉学に励むようである。キャンパス内の芝生、建物内のロビー、廊下、階段、食堂あるいは図書館と場所を厭わず時間の合い間を見て勉強している姿が特に目につく。食堂のテーブルには、混雑する昼食時等の時間帯には勉強を禁止する旨の注意書きが置かれている程である。廊下や階段では女子学生とて、どっかと腰をおろして周囲をまるで気に懸ける様子もなく書物等を読んでいる。図書館を利用出来る時間は平日なら深夜12時までというところが少ない。勉強したい者にはこのように施設を惜しみなく提供する大学側の姿勢も好ましい。キャンパス内で場所を厭わず勉強する学生は大部分学部学生であろう。大学院生の場合は、日本におけると同様に、普通は師事する教授の研究室で自分の居場所が与えられる。院生達は研究室に来ると同僚達との無駄話で長々と時間を浪費したりはしない。コーヒー茶碗を片手に所在なげに部屋部屋をうろついて、駄弁りの相手を探し回るような不逞の徒は見当たらないのである。研究室では出来るだけ能率よく勉強なり実験を進め得るよう忙しく立ち回っている。その代わり、夜遅くまで続行するということは余りしないようだ。夕方5時頃までにはほとんどが帰宅(少なくとも一旦は)してしまう。日中に十分働いたとの実感もあろう。この点は私も含

*唯木次男(Tsugio TADAKI), 大阪大学, 産業科学研究所, 金属結晶部門, 清水研究室, 助手, 工学博士, 金属物理

**金属物理セミナー, 1 (1976) 351.

めて学生諸氏にも十分参考になるのではないだろうか？研究室に手間暇かけて出向いて来たことに意義があるのではない。自分で今日はどれ程の勉強あるいは実験を進め得たかが大事なはずである。とは言え、各自が忙しく立ち回っているからと言って研究室での横の繋がりが全くないと言うわけではない。毎日午後3時のコーヒータイトムには然るべき場所にコーヒートと紅茶が無料で提供されている。したがって、気が向けばその場所に出向いて行ってほんの小一時間程の雑談を楽しむことも出来るわけである。リラックスしたいと思わない人にまで雑談の無理強いをしたり、あるいはまた思考の邪魔をしないというのが基本精神のようである。ついでながら、そのティータイムには金属工学関係の院生および職員のみならず、物理学および化学関係のうち特に材料科学に関係した人達がいつときの雑談を楽しみに集まる。したがって、利用の仕方で大変有意義でもある。これに似た機会と場所を日本でも設けることは不可能であろうか？

日本では大学院への進学を希望する学生が近年著しく増大した。もっと勉強したいという学生が増えるのはそれ自身結構なことであろう。ただ、10年以上も前には修士課程でも卒論の内容如何で卒業認定が見送られるという場合もあり、さすがに大学院は厳しいところと思ったりもした。最近ではそのような例を余り聞かない。ひとえに、立派な内容の卒論が多くなったことによるのであろう。しかしその反面、勉強あるいは卒業研究に向けての意気込みを大して感じさせないような学生が目立って来ているようにも思える。余程のことがなければ落第はないとか、あるいはまた、初めから研究室職員の挺子入れを期待するような安易な気持ちが先行してはいないだろうか？ その点、米国の学生は孤立無援に近い状況に置かれていると言って良いだろう。第一に、日本の助手に相当するスタッフは米国の大学には居ない。教授は研究テーマを学生に与えると、後は時々研究経過について討論するだけである。実験の段取りから論文提出に至るまで、すべて自分の責任においてやらねばならない。少し怠けたばかりに仮りに

卒業が危うくなったとしても、誰かが手を貸してくれるわけでもない。更には、せっかく一生懸命やって来ても、最終的には内容の点で不合格と判定されることもあると聞く。授講科目でも不合格点を幾つかとると他の大学へ行かされるとあっては彼等も必死にならざるを得ない。もっとも修士課程の場合、卒業研究は授講科目を幾つか余分にとることによって免除されるという制度もある。博士課程に進学する際には資格テストとして幾つかの科目についての口頭試問を受け、これにパスしなければならない。一科目につきチャンスは3回程与えられているようであるが、この口頭試問は学生にとってかなりの難関のようであった。ただ、担当する教授によって多少の難易があると聞く。

週に一度は学内外の研究者を同学科で招き講演してもらうコロキウムや、不定期ではあったが院生が自主的に行う研究発表会が催された。そのような場で気付いたことは、一人前の研究者は無論のこと、学生の人達でも発表や質問を実に堂々とやってのけるということである。若いからと言って学生達は偉い先生方への質問をちゅう躇しない。先生方もまた若者への返答をないがしろにしない。発表に際しては、学生も大抵は何も見ない。しかも聴衆を見回す程の小憎らしいぐらいの余裕も見せる。質疑応答では、日本人の我々が良くやる照れ笑いをしない。ある外国人が日本人は特別冗談を言い合っているわけでもないのに会話中に良く笑うのは全く理解出来ないと言っているのを聞いたことがある。日本人には照れ笑いの心理が理屈抜きで理解されるのではなかろうかと思われるし、実際自分でも良く無意識のうちにやっているのに時々気付く。しかし、外国に居る間はこの照れ笑いが我ながら気になった。日本人の体質的なこととは言え、少なくとも外国人相手の時にはやめられたらそれに越したことはないだろう。

学生の余暇の過ごし方などについてまだ述べて見たいことはあるが、そろそろ紙面も尽きそうなので省略させて頂く。総じて米国の学生は一生懸命勉強するという印象を受けた。勿論、日本でも勤勉な学生は少なくない。しかし、成績

が芳しくなければ容赦なく退学させられる状況に置かれた者と、極言するならばトコロテン式に押し出されるような状況に置かれた者とでは、自と日常の過ごし方に厳しさの違いが出て来ても当然かも知れない。ついでながら、米国の学生は授業料の代償として先生方に満足の行く講義を要求出来る。具体的には、年に一度か二度先生方の講義を採点する機会が与えられてい

る。先生の方では学生の評価が昇給や昇任に係するとあって彼等の評価に気を配る。私は学生の頃休講があるとうれしがっていた類であるが、この手の学生は米国では余りいないようである。

最後に、比度の留学の機会を与えて下さった大阪大学産業科学研究所教授清水謙一先生に心からお礼申し上げます。



写真1 上空から見たシャンペン・アバナの町。



写真2 イリノイ大学キャンパス内の風景。左から二つ目の建物が金属工学科のもの。